平成27年2月1日発行（毎月1回1日発行）通巻901号

火星

平成27年2月号

七曜抄（九）

山尾玉藻

数へ日の声こぼしゐる雀の木

生涯のてのひらをもて初手水

読初の昼深ければ来る雀

手毬唄山のうしろの山も晴れ

PDF= 俳誌の salon

しろがねの眉けぶりけり薺粥

初旅や薄むらさきの片つ貝

囃されて大よぢれせしどんどの炎

大寒の馬房の塵のきらきらと

風邪の子の耳を大きく癒え始む

衝立のくれなゐ褪する猪の宿

PDF= 俳誌の salon

太白星

杉浦典子

柚提げて大覚寺から道迷ふ

ミロの絵の赤い太陽おでん煮る

ラガー組んで内へ内へと力溜む

圭岳忌瞼の中に銀杏散る

先生を知るひとりなり銀杏散る

冬の雨鳥獣戯画見に並びけり

訪ふたびに紅葉濃かりし博物館

PDF= 俳誌の salon

浜口高子

御火焚や水ふくらんで堰越ゆる

木守柚にひと雨ありし峠口

巻尺の戻る一瞬冬ざるる

荒神の山より剝がす鳥瓜

荒息の綿虫となる坂半ば

荒神谷へゆつくり沈む冬の蝶

太刀魚の総身の照りや神の留守

PDF= 俳誌の salon

火星作品

山尾玉藻選

燠掻いて落葉にあたらしき炎　宝塚　山本耀子

水音を引き摺つてゆく落葉籠

没り日どき枯野に道の見えてきし

つくばひの水を掻い出す今朝の冬

櫓の音のほかに音なき深雪晴

青空の上の空より銀杏黄葉　八幡　坂口夫佐子

胸元へ没り日まつすぐ風邪心地

天窓のひかり四角にひしを樽

南天の房流れゆく年の暮

照り返す枯田の中の徒鴉

柿すだれしてあをぞらの痛さうな　宝塚　蘭定かず子

川まぶしめば穂芒の傾ぎけり

短日や塩して魚の光りたる

PDF= 俳誌の salon

落葉掃きぬるしづけさに目覚めけり

文机のまどろみに来し夕笹子

手どりたる鯉に胴ある豊の秋　大和郡山　城　孝子

山彦のもつとも近しこんにやく玉

拭いてやる馬のまなじり神無月

にほどりの潜ぐ力に暮れにけり

山の辺や日向日蔭の柚のいろ

雪霏霏とまぐろの胴のつやめけり　宝塚　山田美恵子

一陽来復塗椀の湯気ゆたかなる

焼栗を売る影法師冬至晴

板前の赤き手の出す酢牡蠣かな

路面電車にかしこき顔や七五三

立冬の風のま新に大蘇鉄　神戸　深澤　鱶

口切や大名道具のそれらしき

東大寺に隣る十月桜かな

旧道の形にひと栖む夕しぐれ

一鳥は海に紛れし神迎

PDF= 俳誌の salon

選のあとに

山尾　玉藻

水音を引き摺つてゆく落葉籠　　山本　耀子

ゆっくりとした小流れの辺の落葉籠が流れの下へと引き摺られて行く。籠が地を摺る音と流れの音とが重なって中七までの感応となったのだろう。ずっしりと湿った籠の重たさが思われる。

青空の上の空より銀杏黄葉　　坂口夫佐子

この感慨、降りしきる銀杏黄葉をふと見上げた時の直観であろう。作者には銀杏黄葉がまるで澄み渡る空からの使者であるかのように思えたのだろう。そこに自然と作者の啐啄がある。

落葉掃きゐるしづけさに目覚めけり　　蘭定かず子

当然ながら落葉を掃くと音が立つ。しかしそれを敢えて「落葉掃きゐるしづけさ」と述べて、辺りの静けさをこの上なく際立てている。佳句である。

手どりたる鯉に胴ある豊の秋　　城　孝子

「鯉に胴ある」の断定によりはち切れんばかりに肥えた鯉やその大きさが窺い知れよう。抱えられた鯉を軸として豊饒の秋を印象的に描いた。

板前の赤き手の出す酢牡蠣かな　　山田美恵子

常に濡れるので板前の手はふくよかだが、冬は冷たさで赤くなっている。その手が酢牡蠣を出した瞬間に一層赤く感じられたのは、酢で〆められた牡蠣の不透明さの所為であろう。

あをぞらの翳る一瞬ゆりかもめ　　小林　成子

陵を華やぎ渡る百合鷗　　松山　直美

一句目、晴れ渡った冬空へ不意に百合鷗の一群が飛び立った。一瞬、無数の羽々が陽光を遮ったようで、その思いが「翳る」となったのだ。

二句目、昏く静まり返った陵の空を百合鷗の一群が過った。百合鷗たちの白さや賑やかな鳴き声で、華やかな空に一変したのである。

両句は非常に対照的に百合鷗の飛翔を捉えており、その点から「百合鷗」とは背景次第で陽にも負にもなる詩因を抱え

PDF= 俳誌の salon

た季語であることが知れる。

寒鯉のごつんごつんとぶつかりぬ　白数　康弘

餌に寄り集まる鯉だろうか。実際に鯉がぶつかる音が聞こえる筈はないが、寒鯉の寒々しい負のイメージが「ごつんごつん」のオノマトペの感覚を呼んだ。常識的なオノマトペではない。

嘴より鵜の落ちゆける冬の川　河﨑　尚子

この鵜、着水したのではない。上空より餌となる魚めがけて急降下したのである。上五中七の描写が的確であり、殊に「落ちゆける」の表現が臨場感を湛えている。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon

恒星圏

同人 I

米澤光子

立止るポストの前にくさめかな
ペタンクの玉のかちりと冬日向
軍手して三坪半を冬耕す
鈴の緒に風の来てゐる神の留守
くさめして畦の痩せ犬走らする

蘭定かず子

笹鳴に肩上げの針休めけり
木枯や蔵のどこかに火消し壷
学僧の火種配れる落葉かな
くれなゐの天鵞絨の椅子憂国忌
枯野原尽き轟音の滑走路

飯塚ゑ子

たつぷりと眼鏡曇りぬ栗ごはん
かはたれの枯田の上の一つ星
手袋を脱いでサーカス小屋に入る
母の歩に添うて拾ひぬ櫟の実
めん鶏が日なたを駆くるお講凪

伊勢きみこ

嫗らのちぎり絵あそび冬に入る
冬薔薇風呂の温度を一度上げ
電飾の遊覧船や冬ぬくし
小春日や子がウクレレを弾いてをり
重ね着やマウスの電池入れ替ふる

渡辺数子

蜜柑山案内の人と沖を見て
歩こう会を暦に記す霜の晴
抽斗の四隅拭ひぬ冬の鵙
焼芋屋の笛の連れ来し時雨雲
朱の鳥居いくつもくぐり冷まじや

PDF= 俳誌の salon

獅子座

山尾玉藻推薦

同人Ⅱ

庖丁の銘にくづし字冬ぬくし　林範昭

春遠し絶筆の絵は山ひとつ

三角の石が山祇ならひ吹く

沓脱ぎに鉈横たはる冬日かな

日ィ差して少うし紊れ冬すみれ　今澤淑子

東山乳房のやうに紅葉して

霜の夜のインク瑞瑞しく走る

ブリキ缶に飴の音するハロウィーン

色鳥やペットボトルに雨の粒　涼野海音

爽波忌や岩倉ゆきのバスを待つ

小鳥屋の窓開いてゐる小春かな

尻尾なき犬の来てをり日向ぼこ

ほよ宿す木立の奥の冬落暉　西村節子

沓脱に猫の反りたる冬支度

橋立の練炭火鉢汐流る

着ぶくれて融雪パイプまたぎけり

今年酒そそぎし墓と向き合へり　湯谷良

白熊の冬の入り日に腰おとす

枯芦や田舟のくぐる橋いくつ

迷路めく水路に田舟冬ざるる

はつふゆの入浴剤の浅葱色　藤田素子

稚あやす婆の口もと冬の鵙

電柱の相合傘に夕しぐれ

みささぎに鴉の声や冬旱

カンテラの灯に獣めく朴落葉　西畑敦子

露天湯へ径ゆづり合ふちやんちやんこ

朴落葉しづかに積もる秘湯かな

シャンソンの口ついて出る古ジャケツ

PDF= 俳誌の salon